

コミュニティー再生からのまちづくり 目指すは日本一元気で魅力あるまち

合併を機に実現した 人口増と財政好転

沖縄本島南部に位置し、市域の三方を美しい海岸線に囲まれた南城市は、平成18年1月1日、佐敷町・知念村・玉城村・大里村の1町3村の合併により、新市として誕生した。南城市を形成する旧4町村は琉球王国時代、「東四間切」と呼ばれる一種の行政区を形成していたとされる。東は王国の中心・首里城(那覇市)から見て太陽が昇る方向(あがりかた＝東方)を意味する。東四間切はその東方にあつて、この世で最も早く日が昇る(夜が明ける)4つの神聖な地域——という意味を表すとされる。

太陽神信仰を基調とする琉球王国にとって、南城の地が太古からはぐくんできたこのような自然環境が、『格別なもの』として共通認識されていたことは想像に難くない。

南城の地が古来、神聖な地域と認識されていた背景には、琉球創世の物語ともいえるべき「琉球開闢神話」の舞台がまさにこの地だといふことがある。琉球の創世神・アマミキヨは南城市の沖合に浮かぶ久高島にまず降臨し、ヤハラヅカサの浜(玉城地区)から本島に上陸したとされている。そしてアマミキヨは五穀の種を南城の地にまき、それが沖縄全土に広まっていった。アマミキヨはその際に、南城の地に7つの祈りの場(御嶽＝うたき)を創り、そのうちの1つが先年、世界文化遺産にも登録された斎場御嶽(せーふあうたき)だったというのが、創世神話の主要ストーリーなのだ。

現実の歴史においても、佐敷地区に今も遺構が残る佐敷グスク(城)は、15世紀初頭に琉球を統一し、琉球王国を建国した英雄・尚巴志(しょうはし)が生まれ育った揺籃(ようらん)の地であり、前述の開闢神話とも密接につながってくる。

現在の南城市を形成する4地域はこのよう

こじゃけいしゅん
古謝景春
南城市長



に、15世紀初頭に成立した琉球王朝時代から、格別な一体感(絆)で結ばれてきたといふことがよく分かるのだ。

「まさに平成の大合併によって、この地区は本来のまとまりを取り戻したのだといえ



ます」
 そう語る古謝景春・南城市長は、旧知念村
 村長から南城市の初代市長に就任して現在3
 期目。就任以来、南城市の持つこうした文化
 的・歴史的バックグラウンドに根差した「原
 点回帰のまちづくり」を打ち出すとともに、
 豊かな自然環境、那覇市に隣接する都市的環
 境などを有効活用する形で、新市誕生以来の
 スローガン「日本一元気で魅力あるまちづく



り」に基づく、各種の事業・施策を精力的に
 牽引してきた。その端的な成果の一つとし
 て、例えば人口増と財政状況の改善が挙げら
 れる。
 「合併以前の南城市地域は人口が年々減少
 していましたが、合併以降の約10年間で逆に
 32000人増えました。東京や大阪で
 32000人増えても影響はほとんどないかも
 しれません(笑)。しかし人口が4万人を切っ
 ていた地域に、大規模な企業誘致をしたわけ
 でも、大規模な住宅団地を建設したわけでも
 なく、10年間で普通に32000人も人口が増
 えてくるというのは、実は大変なことです。

南城市の海開きは4月下旬(安座真ビーチ)



沖縄最高の聖地とされる世界文化遺産・斎場御嶽



琉球王国時代の城址(玉城グスク)

大都市圏などからの移住者も増えています
 が、人口増の主因はむしろ、外に出ていた次
 男・三男などが戻ってきて、南城市で子育て



ハート形をした南城市の恋人たちの聖地・知念岬公園

を始める例が増えてきたということにあります。南城市民に限らず沖縄県民は家族愛が強い。親元をなるべく離れたくないという若者も少なくありません。それでも次男・三男が外に出て行かざるを得なかったのは、やはり雇用の方が少なかったからです。

そういう人たちが今、少しずつ戻ってきているということ

は、南城市と周辺地

区の雇用状況の好転を端的に示す結果であると、私は考えています」(古謝市長)

また財政状況に関しても、「例えば合併時にわずか5億4000万円しかなかった財政調整基金等の残高が、現在は115億円にまで達している」(古謝市長)というから素晴らしい。

利益の出る仕組みで 蘇生する第一次産業

その背景には古謝市長が就任以来、行財政改革の断行とともにねばり強く進めてきた、



大人気の南城市イメージキャラクター「なんじい」(海開き)

地域産業の活性化(利益の出る仕組みづくりなど)に向けた各種事業・施策の積み重ねなどがある。同時に平成22年、那覇広域都市計画区域からの離脱を果たしたことで、独自のまちづくりが可能になったという事情も挙げられるだろう。

「広域圏からの離脱については、私の重要な選挙公約でもありました。当時の情勢としては全国的に広域圏の形成が進められていて、それがまちの発展に良い影響をもたらす地域も、確かにたくさんあるのだとは思いますが、しかし、南城市の場合には、観光資源として有力な、手つかずに近い歴史・文化遺産がたくさんあり、自然環境にも恵まれています。

観光産業とともに基幹産業を形成する農業・漁業などの第一次産業についても、優れた自然環境を背景にした生産体制の改革やブランド化などを図れば、必ず立ち直れるという確信がありました。

さらにそれらの事業を多角的に展開し、将

来性のある産業構造へと転化させれば、地域の若者たちが外に出ていなくても済む状況が生まれてきます。地元で働き、地元で結婚し、地元で子育てをしていくことのできる可能性が高まるわけです。

ところが若者たちが近所に独立して暮らすうにも、広域圏に基づくそれまでの都市計画では、市街化調整区域が多すぎて集合住宅も自由には作れないなど、さまざまな縛りがありました。広域圏からの離脱とともに、都市計画も見直したことによって、そうした縛りが解消されていき、産業の活性化も徐々に、計画通りに成果を挙げてきました。合併後の南城市の人口増には、そうした要因もあるのです」(古謝市長)

第一次産業の活性化については、いわゆる「売れる仕組み」を矢継ぎ早に作っていったことが大きい。例えば、地元漁師が水揚げしたばかりの新鮮な魚介や水産加工品を、地元産の新鮮な農産物とともに取り揃えた奥武島いまいゆ市場(いまいゆは新鮮な魚という意味)を平成27年に整備した。それを契機に、地元産の新鮮な魚介(クルマエビ、モズク他)や農畜産物(マンゴー、パイナップル、あぐー豚、チーズ他)を求める観光客が大幅に増えた。

それに付随して、地元の新鮮な食材をウリにしたレストランやカフェの進出が増えるなど、これまで低迷気味だった観光販売ルート面からの魚介類・農産物の一次製品・二次製品の売り上げは、大きく伸びつつある。「今後

南城市

(沖縄県)

市 政 ル ポ



海の彼方の理想郷ニライカナイに由来するニライカナイ橋を走る「尚巴志ハーフマラソン」

は六次製品化が課題」（古謝市長）とはいえ、南城市の第一次産業の従事者は今、非常に活気に満ちてきていることが「奥武島いまいゆ市場」のにぎわいを見ただけでも分かる。

さらに農業においては南城市が深く連携し、農協が事業主体となつて実施するハウス栽培が、とりわけ大きく成長し始めている。

「マンゴーやパイナップルなどをはじめとするハウス栽培は、特に伸びていますね。その証拠といえますか、10年以上の勤務経験を持つ市役所の中堅職員が、市役所を退職して、新規にハウス農家へ転向した事例もあるぐらいです（笑）」（古謝市長）

地方公務員というのは言うまでもなく、地方都市では最も安定した職業として人気がある。その職を離れてまで新たにハウス農業をやるうと考える若い職員がいるということは、南城市の農業がまさにそれだけ魅力ある産業になりつつあることの証だろう。

間近に迫る 南部東道路開通がもたらすもの

また畜産に関しても、古謝市長の牽引力が奏功し始めている。

「南城では和牛の仔牛を育てて肥育地に売る畜産が以前から行われていたのですが、合併当初は1頭30〜40万円の仔牛を購入し、育てていました。ところが餌代も30万円ぐらい掛かるということで、儲けがほとんどなかったんですね。そこで専門家のアドバイスもいただいて、最初の購入価格が高くても質の高いブランド牛の仔牛を育てて、高く売ればいいのではないかと発想を転換し、とりあえず1200万円の基金を設けました。それを無利子で貸し付けるから1頭当たり50〜60万円以上の仔牛を買いなさいと畜産農家の人たちを説得したのですが、最初は理解されませんでした。しかし、それでやっていくうちに、1頭80万円以上で売れるようになり、畜産業の業績が右肩上がりに良くなっていきました」（古謝市長）

いずれは南城市内で肥育も行えるような体



琉球創世神話を題材にした市民ミュージカル「太陽の門」の模様と、会場になったシュガーホール（佐敷地区）



制を整えて、南部市町村広域連携による「南部牛を生産していきたい」とも語る古謝市長



沖縄の伝統行事ハーリーに使われる爬虫船



琉球の創世神アマミキヨが降臨した久高島で12年ごとに行われる祭祀・イザイホー

の鋭い経営感覚は、さらに幅広く、多角的にその先のターゲットを見据えている。その焦点は、平成30年代前半に開通が見込まれる地域高規格道路「南部東道路」の存在と、開通後の市政運営に合わされている。

南部東道路は島尻郡南風原町を起点に南城市知念地区に至る、延長12kmの地域高規格道路だが、知念から佐敷、玉城、大里と南城市内4地区のすべてを経由し、南風原南JCTからは那覇空港自動車道と連結する。やはり知念地区と南風原町を結ぶ従来の基幹道路、主要地方道・県道86号線のバイパスという位置付けであるが、那覇市中心部および那覇空港へのアクセスが格段に良くなることから、南城市における今後の観光振興、産業振興、さらには那覇市中心部に立地する各種の基幹的医療施設への迅速な搬送など、市民の医療支援についても大きな効果が期待されている。

度面のアップなどにおいて、大きな効果が見込まれます。那覇市内の救急医療が整った病院へのアクセス時間が短縮されることは、より安心安全な市民の暮らしを実現するという意味で大きな期待があります。『癒やしの空間』としての南城市の特徴と組み合わせれば、医療ツーリズムの展開にも大きなアドバンテージを得ることになります。

当然、一般の観光振興にもアクセスの改善は大きな力になりますが、これについては、そうした効果を一方で活用しながらも、慎重に対処していく必要があると考えています」(古謝市長)

本文冒頭にも書いたように、南城市には琉球開闢神話があり、世界文化遺産の斎場御嶽がある。祈りの場としての神秘性とともに、

「物流面についての効果や、医療面についてのアクセスの利便性の高まりは確実です。南部東道路が開通すれば、南城市の基幹産業である第一次産業の出荷ルート

の拡大や速そうした文化の土壌でもある豊かな自然環境が醸し出す「癒やしの空間」としての厳然たる立ち位置がある。端的にはそれこそが南城市の観光資源の基盤といえる。

南城市を目指す観光客の多くは、だからそうした祈りや癒やしの空間としての、静謐な雰囲気をも保つ南城市に憧れ、期待をして訪れる事例が多いのだろう。

「だから大勢の観光客が観光バスで大量に訪れ、南城市の歴史的背景も考えずに、例えば歩き食いをしながらまちじゅうを占拠するような、そんな種類のにぎわいは欲しくないのです。心静かに史跡や祈りの場を訪れたり、あるいは大自然を活用したスポーツアクティビティを楽しんでいたたり、私たちが誇る南城市らしさをそれぞれの形で満喫していただきたい。南城市に來ると、心も体も元気になるねといったきたい。その上でぜひリーダーになって、深く長く、南城市を楽しんでいただきたい。そのためには南城市も、まちは近代化しても根幹の部分では『いつまでも変わらぬ南城市』を保持しなければならぬ。そんなふうに考えています」(古謝市長)

ムラヤー構想と上がり太陽プラン

古謝市長はそのためにも忘れてならないのが、沖縄を愛してやまなかった芸術家・岡本太郎が著書『沖縄文化論』で南城市の地を表現した、『何もなないこと』の眩暈」という言葉だと



上がり太陽プランのプレゼンターたち

語る。何もない、と岡本太郎がいったのは南
城の祈りの場(御嶽)についてだった。御嶽の
ほとんどは森の中のちよつとした空間で、礼
拝所もなく、ご神体もいかなる偶像もない。
岡本太郎は「その何もないということの素晴
らしさに私は驚嘆した」と書いた。

古謝市長はこの「何もない空間」こそ「南城
市の文化的土壌の象徴」だという。換言すれ

ば「ありのままの南城」「素のままの南城」をよ
り楽しんでもらうための開発は行方が、基盤
を壊すような開発はしたくないという考え方
が、南部東道路開通後の南城市の観光振興の
ポリシーということになる。行財政改革や第
一次産業の振興などにも発揮してきた、古謝
市長の果敢な理念というべきだろう。

こうした理念の根を成すのは、古謝市長が
就任以来、常に発信してきた「原点
回帰のまちづくり」という信条では
ないだろうか。

南城市では原点回帰のまちづく
りの一環として、協働のまちづく
りではぐくむ新しい公共の精神の
増強を図り、同時に公民館を拠点
とした集落単位のコミュニティ
復活を目指す「ムラヤー構想」を推
進している。ユニークなのは地域
での民泊の利用客のために、郷土
芸能などを披露する場としても公
民館を位置付けていることだ。ま
た平成27年に完成した「安座真ムラ
ヤー」は、コミュニティ機能に加
えて、防災拠点としての役割、さ
らには民泊施設としての機能も併
せ持っている。観光客が地域住民
との交流とともに、「ありのままの
南城」を味わうには、まさにうって
つけの施設だ。また「何らかの利益
を生み出さない事業はしません

(笑)」と明言する、古謝市長の経営感覚を体
現したような施設ともいえる。

南城市では市民の提案型協働事業として
「上がり太陽プラン」も実施しており、助成金
を得るための市民のプレゼンテーションは回
を追うごとに熱気が高まっているという。市
民が行政の財政状況やまちづくりの方向性を
よく把握し、ムラヤー感覚(伝統的な共同体
意識)で参画意識を強めつつあるからこそ
現象だろう。地方都市にとって何かと厳しい
情勢が続く現在において、人口を着実に増や
し続け、産業振興・文化振興に加えて、市民
協働のまちづくりもバランスよく推進し続け
る南城市。今後のまちづくりの推移が大いに
期待される。

(取材・文：遠藤隆／取材日平成29年4月18日)



国内初のバス自動走行公道実証実験(SIP自動走行システム)